

ヘブル人への手紙5章7-9節 「苦しみの中の従順」

1A 肉体を取られたキリスト 7

1B 死からの救い

2B 大きな叫びと涙

3B 祈りと願い

2A 従順になられた方 8-9

1B 御子としての学び

2B 様々な苦しみ

3B 完全な者(成熟)

3A キリストに従う者 9

本文

ヘブル人への手紙 5 章に入ります。午後に 5 章全体を一節ずつ学びますが、今朝は 7-9 節までに注目します。「⁷キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。⁸キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び、⁹完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源となり、」

先週の木曜日、アメリカなどでは感謝祭がありました。それが、米国に移民したピルグリムたちが、収穫を神に感謝したということが由来になっていますので、アメリカでは教会もお祝いします。感謝するとしたら何か？ここに書かれているとおり、私たちは、キリストが肉体を取られたことを、何度感謝しても、感謝しきれません。来月は、降誕節に入りますが、私たちは先んじて、イエス様が御子であられるのに、神であるのに、肉体を取られたことに思いを寄せたいと思います。

1A 肉体を取られたキリスト 7

今、読んだ箇所は、イエス様が、捕えられる前に、ゲッセマネの園で祈られた時のことを中心に話しています。その時の壮絶な戦いを描写しています。私たちと全く変わらない肉体を持っておられたイエス様が、どのような苦しみを経っていたのかを説明しています。

1B 死からの救い

まず、「**肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方**」と言っています。神は霊であり、不死の方です。永遠に生きておられます。しかし、キリストは肉体をもって生きておられるので、死を帯びながら生きていたことが、ここからわかります。すでにヘブル書の著者は、死の恐怖に私たちがつながれていることを書いていましたね。「2:14-15 **そういうわけで、子たちがみ**

な血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。」

私たちは、みな、死というものに恐れと不安を抱いています。誰かが病にかかったら、私たちは祈ります。それは病というものの背後に、その先に死というものを感じ取っているからです。イエス様が肉体を取られたことで、その恐れと不安も身にまとってくださったということです。

しかし、「自分を死から救い出すことができる方」と言っていますね。イエス様は、死を免れるためにこうやって祈られたのではありません。そうではなく、イエス様の祈り叫びは、死んでも、よみがえらせてくださる方に必死に祈られたのです。死んでも、それでも生きることを願われて祈ったのです。イエス様は死なれる直前に、大声で叫ばれました。「父よ、あなたの霊をあなたの御手にゆだねます。(ルカ 23:46)」御手にゆだねるところまでいう事が出来たのは、父がご自身をよみがえらせてくださると信頼しておられたからです。しかし、それは壮絶な内なる戦いがありました。ペテロは、その戦いをしていませんでした。だから、死んでもイエス様と共にいると言ったのに、すぐ後で、恐れて、イエス様を知らないと言ったのです。

私たちは、何度も何度も祈っていい祈りがあります。それは、主が自分をよみがえらせてくださる、という約束です。「ヨハネ 11:25 わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」イエス様と同じように、俎板の鯉のように、神の復活に任せるような信頼を抱けるように、祈っていきましょう。

2B 大きな叫びと涙

そして、次にイエス様は祈られている間、「大きな叫び声と涙」を持っておられました。イエス様は、いつも冷静で、大きな声で嘆くなんていうことはないだろうと思込んでしまいます。いいえ、この箇所からはっきりと、イエス様は大きな叫び声をあげ、涙を流されて祈られていたことが分かります。聖書には、どれほど多く、涙を流し、大声を上げている祈りが書かれていることでしょうか！詩篇には、叫びと涙に満ちた祈りが満載です。「39:12 【主】よ私の祈りを聞いてください。助けを求める叫びに耳を傾けてください。私の涙に黙っていないでください。私はあなたとともにいる旅人すべての先祖のように寄留の者なのです。」

私は、自分が泣かないように育てられたとつくづく思うことがあります。親から直接教えられたわけではないですが、周りの雰囲気ですうなったのだと思います。「男は泣かない」と。でも、覚えています、泣いて、泣いて、とまらなかったことを。以前に、チャック・スミス牧師が天に召された時に、涙がとまらなくなったのを分かち合ったことがあります。もう一つは、三年前のこと。妻がMRIの検査で、癌が転移していると診断された時です。彼女が死ぬことを覚悟しました。何か、体につっか

えているものがありました。しかし、親友の牧師が電話をかけてきてくれました。その時に、ようやく嗚咽の涙が出てきたのです。子供のように泣いていました。止まりませんでした。その時に初めて、自分は泣かないように体の深いところに抑えているのだということが分かりました。

主は、声なき声を聞いてくださいます。ハンナの祈りのことを思い出します。彼女は、男の子が生まれずに苦しんでいました。幕屋のところで祈っていました。「Iサム 1:10 ハンナの心は痛んでいました。彼女は激しく泣いて、主に祈った。」そして、こうも書いています。「1:13 ハンナは心で祈っていたので、唇だけが動いて、声が聞こえなかった。それでエリは彼女が酔っているのだと思った。」言葉にさえならない祈りがあります。しかし、主は聞いてくださっています。イエスご自身が、そのような、もたえ苦しむ祈りを献げてくださいました。

3B 祈りと願い

そして、イエス様は、「**祈りと願いをささげ**」たとあります。祈ることは一般的な内容ですが、願いはその祈りの中で、さらに具体的に切に願っていることを述べます。イエス様は、公の生涯、祈りを絶えず行っておられました。それは、肉体を取られたイエス様が、父なる神にどれほど頼らなければいけないかをご存じだったからです。ルカによる福音書は、人としてのイエス様をよく描いているとしばしばいわれますが、その理由の一つが祈りです。「6:12 そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。」

祈りは、私たちの力や知恵では何もできないことを示します。時に祈りさえ、自分の正しさを誇示するために、自己義認のような祈りを、パリサイ人の祈りとしてイエス様が紹介されていたように、してしまいますが、基本は、自分には何もできないことを認めているから、祈れます。それで、私たちはどうしても、祈りが最後に回ってしまうのです。自分でああやって、こうやって、うまくいかないので、それで祈ってしまいます。しかし本来なら、イエス様のように、初めに祈って、それで父なる神のみこころを知って、そのみこころを行うという順番ですね。しかし神は、たとえ祈りが後になってしまっても、それでも憐れみを示して、苦しみから救い出してくださいます。

思い出すのは、王ヒゼキヤです。アッシリアによって、ユダの町々が次々と攻略されました。残るはエルサレムだけとなりました。ヒゼキヤは、ラキシュが攻略されて、アッシリアの王から金銀を要求されたら、主の宮と王宮の宝物倉にある銀を用意し、さらに神殿の扉と柱に張り付けている金を剥ぎ取って、渡しています。しかし、ヒゼキヤはさらに窮地に追い込まれます。密かに、使節をエジプトに送って、援護をお願いしていたのですが、それもアッシリアに知られるところとなったのです。自分たちの知恵や力がすべて尽きてしまいました。

それで、王から遣わされたラブ・シャケが、次々とヒゼキヤのことを貶める言葉を語ります。しかし、主は見ておられました。アッシリアは、他の異教の神々を倒したように、エルサレムにいる神も

倒すと豪語したのです。ヒゼキヤは、衣を裂いて主の宮に入りました。アッシリアの王から来た手紙も、その前に広げて、祈りました。ところで、私はある信仰の友から、何度となく宛先不明の手紙が送られてきて、その人を脅す内容でした。聖書の言葉も引用されていました。それで、私は、「手紙を広げて祈ろう。」と提案して、主に読んで聞かせるようにして広げて、祈りました。イザヤが、励ましの預言を行いました。果たして、その夜、主の使いが来て、アッシリアの陣営 18 万 5 千人を打倒しました。翌朝早く見ると、彼らはみな死体になっていたのです。

私たちは、主に祈り、願い求めますが、どこまでへりくだっているかどうかが試されますね？つまり、本当に祈り、願っているのか？であります。自分がいろいろ行っていて、いろいろやっていて、ついでに祈っていくみたいに、付け足しで祈っていれば、主は、ご自分にしか頼れないところにまで、私たちを導かれます。そして私たちがただ主のみ期待し、この方に頼って祈り、願うようなところにまで導かれるのです。そして、この方にこそ救いがあると分かるようにしてくださいます。

2A 従順になられた方 8-9

1B 御子としての学び

そして 8 節をご覧ください。「**キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び**」とあります。御子は、神です。神はすべてを知っておられる方です。ですから、神が学ぶことはできません。しかし、御子は肉体を取られました。人となりました。人にある限界をご自身に身に着けられました。

イザヤの預言には、主のしもべについての預言があります。メシアの預言です。この方が弟子のようになったということです。「50:4-6 【神】である主は、私に弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、朝ごとに私を呼び覚まし、私の耳を呼び覚まして、私が弟子として聞くようにされる。【神】である主は私の耳を開いてくださった。私は逆らわず、うしろに退きもせず、打つ者に背中を任せ、ひげを抜く者に頬を任せ、侮辱されても、唾をかけられても、顔を隠さなかった。」弟子とは、師から学ぶ者です。イエス様は御子であられますから、父なら学ぶ方ではありません。けれども人の姿を取ってくださり、あたかも弟子のようになってくださったのです。父なる神から聞き、学び、そして、そのみことばをもって、疲れたものを励ました。そして朝ごとに、呼び覚まして、耳を呼び覚まして、弟子として聞くようにされています。それはあたかも、私たちが朝のデポジションを持ち、主から聞いて、与えられたことばをもって、他の人々を励ますように、です。主は、私たちに弟子になるように呼ばれていますが、主イエスご自身が父なる神に対して、弟子となりました。

そして、5 節に「【神】である主は私の耳を開いてくださった。」とあります。これは、出エジプト記 21 章で、主人のもとにいたい奴隷に対して、錐でその耳たぶを刺し通すことを意味しています。「出 21:6 その主人は彼を神のもとに連れて行く。それから戸または門柱のところに連れて行き、きりで彼の耳を刺し通す。彼はいつまでも主人に仕えることができる。」ちょうど、耳にイヤリングの

穴をあけるような儀式です。こうやって、主人の言うことを一生涯、聞いていく儀式になっています。そうしたしもべの姿を、イエス様は取られたのです。だから、その次に出てくるのは、「私は逆らわず、うしろに退きもせず、打つ者に背中を任せ、ひげを抜く者に頬を任せ、侮辱されても、唾をかけられても、顔を隠さなかった。」となっています。主が捕えられて、受けた仕打ちです。こんなことはもちろん、すべて不条理なのですが、しかし、主なる神がご自身に言われたことを聞いているので、その者たちにするがままにされたのです。

2B 様々な苦しみ

そして、様々な苦しみによって、従順を学んだとありますね。苦しみは、第一に、私たちが神と取り引きができないようにさせます。神が自分にこれこれの良いことをしてくださるから、だから従います、という下心があるとします。しかし、苦しみの中でそれでも主に従うというのは、純粋な従順です。主が言われたからという理由だけで、従うのですから。本来、それが本物の従順です。そして、主を愛している姿です。

サタンがヨブについて、主をそそのかしましたね。このように、言っています。「ヨブ 1:9-11 ヨブは理由もなく神を恐れているのでしょうか。あなたが、彼の周り、彼の家の周り、そしてすべての財産の周りに、垣を巡らされたのではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地に増え広がっているのです。しかし、手を伸ばして、彼のすべての財産を打ってみてください。彼はきっと、面と向かってあなたを呪うに違いありません。」ヨブを祝福しているから、だから、ヨブは主を恐れているのだということです。主は、サタンが彼の財産を奪うことを許されました。家畜がなくなり、息子、娘もいなくなったのに、ヨブは主をほめたたえたのです。「1:21 主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」ヨブは、苦しみの中でなおも主をほめたたえました。これが、苦しみによって従順を学ぶということです。

イエス様は、ゲッセマネの園でこのことを学ばれました。もだえ苦しむ祈りの中で、こう言われました。「ルカ 22:42 父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように。」わたしの願いではなく、みこころがなりますようにと祈られました。父なる神に自分の願いを明け渡し、この方のみこころにご自身をお任せになりました。

3B 完全な者(成熟)

そして、「**完全な者とされ**」たとあります。これはどういうことでしょうか？ イエス様は、初めから完全な方ではなかったのではないのでしょうか？ ここでは、人となられたイエス様が、最後まで従順であられた、ということです。「ピリ 2:7-8 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」主は最後の最後まで従われて、それで十字架の上で「完了した」と語られました。

この完全な者というのは、十分に成熟したという意味合いになります。霊的に成長して、成熟している人は、主に従順であり続けて、それが十分に行われている人のことです。苦しみの中にあっても、信仰を働かせて耐え忍んで、その熟度が高いことを意味しています。ヤコブが、こう言いました。「ヤコブ 1:3-4 あなたがたが知っているとおりに、信仰が試されると忍耐が生まれます。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。」

3A キリストに従う者 9

そして、最後に、「**ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源**」となられたとあります。イエス様が、私たちに永遠の救いをもたらします。ヘブル人への手紙では、もっと後に、救いが単なる一時的なものではなく、永遠に救うものであることを詳しく論じていきます。救われて、何百年も神の国にいたけれども、途中でそれが消え去って、また元の木阿弥、罪の世界に戻るといことはないので、永遠に救われるのです。

その永遠の救いを受け取る人々は、「**ご自分に従うすべての人**」と言っているのですね。イエス様が肉体を取られて、通られた苦しみは、キリストに従う者たちが苦しみを受けている時の模範であり、また支えなのです。ペテロが、第一の手紙で、迫害の中にいるキリスト者にこのように励ましています。「2:20-21 罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神の御前に喜ばれることです。このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。」キリストが模範です。

私たちの内に、キリストがおられるというのは、こういうことです。キリスト者は、キリストに結ばれた者です。キリストが生きておられます。ですから、私たちの受ける苦しみは、無意味なもの、無駄なものではありません。キリストがそこで形造られてるのです。そして、その姿を見て、キリストが現れます。自分自身はもだえています。解答がありません。クリスチャンとしてこれは、なさけないのではないか？と思うかもしれません。いいえ、人々はそこに真実を見ているのです。何か、形だけ整えて、人々を批評し、見下しているキリスト者は、パリサイ派の臭いはしても、キリストの香りは放っていません。私たちが、その苦しみの中で従順を学んでいる時に、人々はキリストを私たちに見るのです。へりくだりの道です。祈りの道です。